

欧州研究旅行雑記

菊池一隆

2007年8月10日から8月31日で21日間という短期間であったが、華僑史、戦争史、及びレジスタンスを考察しながら、フランス、ハンガリー、ドイツなどを回った。同行者は神戸大学大学院生の田中剛である。彼は独自にモンゴル関係史料の調査、収集をしたので、その点に関しては、田中剛自身に質問していただきたい。私の場合、主に戦時中のフランス・ドイツ各華僑に関する史料調査、収集を目指した。また、できる限り中華街、もしくは中華料理店を訪れた。それは華僑を理解するためと、現在の中華街に対しては勘を養うためであった。それと共に旅行中、中華料理店で栄養があり、相対的に安価な中華料理を主に食した結果である（フランス料理は一般的に高価）。なお、私は帰国後、依頼を受けるまで、こうした文章を書く予定が全くなかったので、旅行中、私自身の研究構想、研究進展のみを目指しており、各地図書館・档案馆の入館方法、所蔵史料全般と特色、コピー代等々を書き留めなかった。本稿は、その意味でこれらに関して厳密なものではないということをお断りしておきたい。研究を入れたエッセーでもよいということなので引き受けた。このように、本稿はエピソードも入れた「雑記」である。これを通じて、欧州における中国関係史料の重要性や欧州事情への知識、関心を少しでも喚起できれば、と考えている。

8月10日、名古屋の中部国際空港から飛び立ち、韓国の仁川経由であった。仁川からパリのドゴール空港に到着した。所要時間は約11時間であった。ひとまずパリの繁華街も見ておく必要があると考え、モンマルトルのホテルに投宿（日本で予約済。2日間のみ）。オペラ座も近い。「伝統的中華街」であるベルヴェルで温州料理を食す。このチャイナタウンには浙江出身者が多いそうだ。8月12日にはパリ郊外のアポジアホテルに移動し、数日間、予定通りフランス国立図書館に通う。セーヌ川河畔の土手を徒歩で片道約30分、往復1時間。セーヌ川河畔とはいえ、観光地ではなく、工事中、河川掃除船などもあり、景観はよいとはいえない。エッフェル塔がマッチ棒のように見える。河畔を歩きながら、今回の研究旅行は史料収集と同時に、模索の旅であり、「新たな著書出版のためには新たな自己を生み出さなくてはならない」と考えていた。

フランス国立図書館での入館手続きは結構煩雑さを感じた。研究テーマなどについて種々質問を受け、写真を撮られ、入館証を受け取る。英語で質問すると、「英語はできない」と言い、フランス語で返事をする。つまり英語を理解し、おそらく私の何倍も流暢に英語を操るのであろう。とはいえ、不親切なわけではなく、いろいろ世話をしてくれる。その後、エスカレーターに乗って、地下へ地下へと降りていく。最初は、まるで牢獄に落ちていくような錯覚に襲われた。一旦広い閲覧室にはいると、無数の人々が研究のため、書籍や档案などを開いている。分野別に一つ一つカウンターがあり、何人かの館員が親切に対応してくれる。フランス国立図書館には、“Chinois de France”があり、フランス語と中国語でフランス華僑が歴史的に説明され、当時（1900年以降）のフランス華僑関係の各種写真が収められている。これによって、フランス華僑史の全般的な流れを押さえることができる。また、「Voice from Wartime France 1939-1945」のマイクロフィルムを主に見た。フランス語の史料にもかかわらず、英語タイトルになっているのはイギリス人が収集した結果らしい。主にレジスタンスなどが出していた“La Liberation”，“LA RESISTANCE REPUBLICAINE”などフランス語の各種新聞、号外などが収められている。これらを尽く見たが、日本の中国侵略、シンガポール陥落の記事はあっても華僑関係史料は皆無に近い。つまり華僑・中国人留学生などがレジスタンスに参加していた可能性はないようだ。レジスタンス側も団結を強めるため、華僑参加を喜ばなかったし、華僑側も抗日は考えても反ナチスになる必要性はなかったと言えるのかもしれない。カウンターの新聞専門の女性スタッフが、フランス国立図書館には当該時期のフランス語新聞が大量に保存されていると言っていた。38, 39年以降に焦点を絞り、少し見たが、関連記事を見つけることができなかった。将来、もし機会があれば、時間をかけてこちらの方も徹底的に読み込む必要があるのかもしれない。

夕方、イタリア広場の近くにも新興の華僑街があると知り、行ってみる。華僑街とはいえ、華僑食品店などと共に、ベトナム料理店、タイ料理店などが入り乱れ、華僑のみが軒を並べる華僑街とは異質な感じがした。だが、ベトナム華僑の可能性もあるとも考えたが、顔つきなどはベトナム人そのものである。

我々はパリを後にし、新幹線でリヨンに向かった。車窓に流れる牧場、白い牛、羊、そして、広がる向日葵畑。フランスは農業国家で、フランス人は自己を確立した尊敬すべき頑固な「田舎者」と思う。それ故にこそ、その基盤の上に驚くべき世界的な文化を形成し得た。そのことを、どのように考えればよいのか。リyonはパリとは異なる顔を持つ街で、ローヌ河とソーヌ河に挟まれた美しい街であり、生糸、繊維を通してアジアとの関係が極めて深い。

目的はリyon市立図書館である。パリ国立図書館に比して開放的な感じがする。狙いは明白である。フランス、もしくはリyonで抗日戦争時期に刊行された華僑系新聞、パンフレットを見つけることにある。まず中文部に行ってみる。そこで、フランス人の Valetina



リヨン華裔連誼會



リヨンのチャイナタウンの一角

de Mote さんの援助を得た。彼女は中国の上海などに図書館の会議で行ったことがあり、中国語が堪能である（「王蘭」という中国名も刷り込まれた名刺をもらった）。彼女によると、中文部へ日本人研究者が来たのは、10年振り位と言って喜んでいて、リヨンの市立図書館にはもちろん東洋人は来るが、フランス史やリヨン関係の資料を集めて来るそうだ。その結果、リヨンの市立図書館の中文部に所蔵されている資料は欧米人が閲覧する。実際に閲覧している人々も見て我々を除けば欧米人や東洋人といってもインド人のようである。

1920～45年頃の中国関係の重要史料が所蔵されている。なぜかと言えば、著名な中法大学の所蔵史料を、リヨンの市立図書館にそのまますべて移管したからである。私は、リヨンの中国人芸術家による『中国留法芸術学会第六届工作報告—専關於抗戰救国方面—』（1938年8月1日）、旅法華僑友誼會『華僑時報』、及び旅法華僑抗日連合會編『全民抗日的根本問題』（1937年5月）所収、華多「華僑与全民抗日連合戦線」などを収集した。それぞれが、それほど長いものではないが、貴重な史料である。コピー制限枚数が20枚であるが、日本からわざわざ来たということで、それ以上、幾つかをデジカメで撮すことを特別に許可してくれた。その他、諦めざるを得なかったものに、『国際反侵略運動大会中国分会』（1939～40）、巴黎中国学生会編『抗日戦訊』（1938～39年）などがあつた。当然のことながら、鄧小平らによる勤工儉学などを研究する場合も、リヨンの市立図書館所蔵の史料は重要、かつ不可欠なものであろう。なお、レジスタンス記念館に立ち寄り、反ナチスのレジスタンス、及びロマ族についての展示を見た。

なお、リヨンでは、私の大阪教育大学時代の同僚、住谷氏（フランス文学）がリヨン大学に客員教授として来ており、美味な葡萄酒と大量のムール貝を御馳走になった。また、住谷氏の友人である山口氏（リヨン大学日本語科教師。妻はフランス人医者）の車で市内を案内してもらった。「リヨンにも中華街がある」と言うので案内してもらったが、それほど大きくなく、見たところ、十数軒と言うところであらうか。元来、韓国人の料理店が1、2軒あつ

たらしいが、「いつの間にか排斥されて、華僑だけになった」という。

リヨンから、経過点であるスイスのチュリッヒまでは列車。そこで、次の列車を待つ間、夜食として韓国料理を食べた。チュリッヒは全般的に物価が高いのに驚かされる。国際会議などが数多く開催され、外国人が多いためであろうか。それより驚かされるのが、駅のピヤガーデン。ここは結構広く40~50人も収容できるように見え、老人から青少年までが集まっている。高校生風の男女も多く、煙草をふかしながら、ビールを飲んでいる。「16歳以上がビール可」とも聞いたが、自由さとその雰囲気には圧倒される。

ここからが指定席がとれずに夜行列車に乗り込む。そのため、車掌の許可を得て、指定客が乗ってくるまでコンパートメントに入れてもらった。ただ、夜3時半頃に指定券を持った家族連れにたたき起こされる。通路はすでに何人かの人々に占拠されており、トイレの脇しか空いておらず、「ここで寝なければならぬのか」と暗澹たる気持ちになった。幸いにも田中剛が2人入れてくれるコンパートメントがあるので、そこに入れてもらった。オーストリア人2人、イタリア人2人がおり、愉快的な連中であつた。特にオーストリア人の四〇代前後の男が酔っぱらっており、盛んにラッパ飲みした葡萄酒を勧める。イタリア人も回し飲みしており、肝炎などが怖い気持ちもあつたが、一宿の恩義。私もラッパ飲みで応じた。美味な葡萄酒であつた。彼はザウツブルグで降りた。彼は、シューベルトの故郷なので、「案内するから一緒に降りよう」と何度も言ったが、我々は先を急がなくてはならない。

ウイーン泊。中国人団体を率いていたガイドに「中華街はあるのか」と聞くと、「ウイーンに中華街はない」という。少々落胆したが、実際に歩いていると、中華料理屋はポツポツとある。近くに青島大飯店があつたので、入ってみようかとも思ったが、高級中華料理店で料理代が高く、断念した。

ウイーンから列車に乗り、ブダペストに向かった。小さな可愛い農家がポツン、ポツンとお伽倻のように佇み、葡萄、向日葵、トウモロコシ畑などが続く。移り変わる農村風景を見ながら、ハンガリーの集団農場はどのように再編されているのかとか漠然と考えていた。ブダペスト駅で予約したホテルは三つ星だが、改修中であり、社会主義時代からの建物らしく、天井は高い。フロントの女性に「ブダペストには大規模なチャイナマーケットがあるはずだが」と聞いても、小説を読みふけており、「知らない」と素っ気ない。ハンガリーは親日的と聞いたが、そのようには見えない。もちろん1人だけを見て、結論を出すわけにはいかないが……。夜、中華料理屋にでも行って、チャイナマーケットがどこにあるのか聞いてみることにした。田中剛と2人で歩いていると、突然の大雨で、雷も鳴っている。丁度あつた広東料理屋に逃げ込む。そこでは中国人の結婚式が開催されていた。従業員の中国人女性は忙しいにもかかわらず、とても親切で、料理も美味であつた。ホテルに戻り、映りの悪いテレビニュースを見ていた田中剛が「(ドナウに架かる)鎖橋付近ではハンガリー建国1000周年を祝い、賑やかで花火を打ち上げている」という。英雄広場付近

に投宿したことを後悔したが、致し方ない。

翌日、駅で「チャイナマーケットはあり、極めて大規模」と聞き、行き方を教えてもらい、バスに乗る。バスを下車した後、歩いていくと、ブダペストの中心街で全くと言っていいほど見かけなかった中国人が何人か歩いており、チャイナマーケットが近いことを予測させる。実際に行ってみると、チャイナマーケットといっても中国人のみならず、ロシア人、ウクライナ人、トルコ人、ベトナム人など、雑多に店を開いている。主に雑貨や服、下着などを売っていた。次第に他民族がいなくなり、中国人だけの中華街として集約されていくのであろうか。ともあれブダペスト、特にチャイナマーケットは西欧、東欧、西アジア、さらに中国新疆省への窓口として荒々しく地歩を固めていることを予測させる。ここは、ハンガリー人にはほとんど知られていないようだが、かなり大規模で、奥行きがあり、道の対面にも中国人経営の服や箆笥などを仕入れ、販売するビルがある。ビルには食堂もあり、安価ではあるが、料理はインスタントラーメンのようなものを出された。中国人理髪店も雑居ビルの中にある。中国人経営の旅行社もあった。このように、周辺部は中国人が固めているようである。

帰途、国営工場らしきところは鎖で鉄の門が閉められ、その隙間から見ると、正面玄関の前には団結を示す労働者数人の銅像があったが、少し淋しげに見えた。その他、ブダペストでは歴史博物館、及びチングスハン展覧会などに行く。ハンガリー人にはアジア系騎馬民族としてマジャール人の誇りが感じられる。ただし、スラブやゲルマンなどの血が入っているのであろうか、金髪も多く、彫りが深く、鼻が高く、背はあまり高くないが、全くアジア人には見えない。

ブダペストから寝台列車に乗り込み、ポーランドのアウシュビッツに向かう。途中、スロバキア、そしてポーランドでパスポートの検査のため、たたき起こされる。とはいえ、ポーランドの制服姿の検査官は厳めしい感じであったが、日本人と分かると、「ケンドー、

ブダペスト・チャイナマーケットの入口



同上の内部店舗





ブダペスト・チャイナマーケットの大通りを挟んで対面。ビル内の洋品店。こども、ほとんどが中国人経営と見受けられる。

ケンドー」とかいう。剣道をやっていると言う。そこで私も「I have black belt of Judo (柔道)」と応じ、熱い握手をした。人類みな兄弟。午前6時半、クラクス到着。ホテルを見つけ、荷物を置き、朝食をとり、アウシュビッツへのバスに乗る。70キロで、所要時間は約1時間30分。20世紀「人類の三大愚行」(私はアウシュビッツ、南京大虐殺、広島・長崎への原爆投下を「三大愚行」と考えている)である、ナチスドイツによるユダヤ人、ポーランド人、ロマ族、ロシア人、及び抵抗的ドイツ人への殺戮、消滅をどのように歴史的に位置づければよいのか。多くの参観者が来ていた。各国の老若男女、そして子供が参観に来ていることは観光気分の者がいたとしても、意義がある。ドイツの要請で、最も残酷な顔の半面のアルコール漬けや首から上の剥製などは片づけられたとも聞いたが、髪の毛で織った絨毯、大量の眼鏡や義足は展示されていた。加害国ドイツと被害国ポーランドは日本と中国、韓国・朝鮮よりは相互理解が進んでいると言われるけれども、まだ道半ばで、したがって矛盾は解消されていない。イスラエル国旗をマントのように肩に覆った女子高生を含むユダヤ人高校生グループが幾つか来ていたが、彼らの考えを是非とも聞きたいところであった。ともあれ私は戦争史を専門とする歴史家を自認する以上、この問題は決して避けては通れないことを再確認した。私のペンはまだ弱く、さらに私の歴史学は未だ未熟ではあるけれども、自らの頭脳をさらに鍛え上げ、実証、分析を積み重ね、こうした戦争、愚行に対して少しでも闘いうる歴史理論を構築できないものか。

クラクスから約10時間の長距離列車でベルリンへ。ドイツに入ると角張ったビルや松林が現れた。ハンガリーを筆頭に年代を経た大木には圧倒されるし、またドイツの如く、集合体としての森を大切にしていることは実感として理解できる。欧州は各地のバラ園など花壇が大変美しく、散歩するだけで、心が安まってくる。私は疲れた時、各国の公園の芝生などで寝ころび、居眠り半分に、青空と流れる白い雲を見るのが好きである。ドイツの公園で空を見つめていた時、1匹の蜜蜂が飛んできた。それを見て、なぜか不思議な感覚に襲われた。今回の欧州旅行を回顧すると、確かに花壇では蜜蜂だけが忙しく働いてい

た。ところが、車窓から、列車の通過に驚いた僅かな白い蝶が何回か飛び上がるのを見たが、それ以外、花壇には蝶がほとんど舞っていなかった。蝶の舞わない花壇は淋しい。他の虫も圧倒的に少ない。元来、欧州（イギリスを除く）には蝶が少ないのであろうか。それとも、木々を守ることに懸命で、殺虫剤を使いすぎ、蜜蜂などを除く、虫を過剰に殺しているのではないかとも思えてきた。

フンボルト大学にはホテルから歩いていったが、ヘーゲル、マルクス、アインシュタインなどが卒業した大学とあって、やはり身の引き締まる思いであった。私は日本国内はもちろん、海外でも多くの大学を訪れたが、他の大学でこうしたことを感じたことはなかった。やはりヘーゲルとマルクスは無視できない。ポツダムまで電車で行き、ポツダム会議が開催された建物を参観。英米、ソ連との間で多くの駆け引きがあったのであろう。その後、ザクセンハウゼン強制収容所に行った。ユダヤ人収容とされているが、どちらかといえば、反ナチス運動家、自由主義者、共産主義者などが収容されていたようだ。軍駐屯地が隣接しており、収容者のある部分が軍労働に強制的動員された可能性を示唆する。ただし、ここは戦後、長期間にわたりソ連軍基地として使用されていたため、広い敷地には収容所としての遺構はあまりなく、僅かに見張り塔、記念碑や小規模な資料館があるだけである。

ベルリンのドイツ国立図書館では多くの収穫があった。東亜部図書館員の呂豊安氏の援助を受け、ベルリンにおける中国人留学生に関する良質の史料を入手できた。例えば、中華民国留徳学生会編『留徳同学録』（1939年9月）は貴重であり、中国人留学生の姓名、年齢、出身地、最終学歴、専門などがわかり、同時に「(民国) 27年大事記」が付されている。もちろん、これらだけでは不十分で、他史料での補強を必要とするが、フランスで入手した資料を含めて、戦時期における「フランス・ドイツ華僑」に関する論文にやっと着手できる。以前、アメリカ、イギリスに行った際、すでに多くの華僑関係史料を入手しており、「英米華僑」に関する論文も執筆可能である。これらをそれぞれ独立論文として書いた後、総合化し、かつ分析を加え、「抗日戦争時期における欧米華僑の動態と構造」（仮題）として開拓、結晶化すればよい。可能性は無限である。

その他、ドイツ連邦公文書館があり、『中国駐在ドイツ大使館』档案が所蔵されている。その中には、①「中国・東アジアにおける外交・領事当局」（1920～1944年、全33巻）、②「中国政治・中国の外交政策」（1920～1940年、全143巻）などが包括されている。当然、ドイツの蒋介石・国民政府に関する見方、中独関係を考察する上で、興味深い档案が所蔵されているようだ。ただ档案が出てくるまで時間がかかり、翌日になると言われ、今回は、残念ながら断念せざるを得なかった。田中剛は若干のコピーをとり、目録も見ているので、詳細については彼に質問してもらいたい。

ベルリンの壁博物館、特にテレビによるナチスドイツ下の圧政に関する特集は圧巻であり、自らの国の負の遺産・歴史を真正面から、精一杯総括しようとするドイツ人の姿勢には畏敬の念を覚えざるを得ない。フランス人の独立した個の集合体としてのレジスタンス

と同様、ドイツ人の過去に真摯に向き合う姿にはやはり感銘を覚える。壁博物館の写真の1枚には収容所の金網の中から、ナチス指導者・幹部に抗議する男の姿が写っていた。命を賭したその行動と勇気。同じ立場に追い込まれた中で、私は同様な行動をとれるのだろうか。そんなことを無意識のうちに考えていた。

ともあれ今回の欧州研究旅行では多くのヒントを得て、研究構想を練ることができた。空白であった戦時期の欧州華僑を包括することで、世界華僑の専門書完成への足がかりができたと考えている。戦争史に関する考えも深化させ、多くのヒントを得た。本当に何度も長時間、列車に乗り続けた。列車での移動もよい。流れる異国の風景の中で人生を考え、現在、何を為すべきかを考えさせ、初心に戻り、本格的に研究に再突入する精神的準備ができるのである。その上、重いリックを背負って歩き回ること、体力的にも研究を継続でき、発展させる自信を復活させた。後は体を大事に無理をして、一步一步前進するのみである。最後に、列車の予約などで奔走してくれた田中剛に感謝するとともに、彼の研究面での飛躍を心より願っている。

(きくち かずたか・愛知学院大学)